

Title	石から生まれたもの：孫悟空の誕生に関する一考察
Sub Title	One who was born of stone : a note on the birth of Sun Wukong
Author	森, 雅子(Mori, Masako)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.77(77)- 95(95)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 東洋史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石から生まれたもの

——孫悟空の誕生に関する一考察——

森 雅 子

一 はじめに

孫悟空は、明代の呉承恩がそれまで様々な先行資料で語られ、記録されていた唐僧玄奘三蔵の西天取経の旅の物語をまとめ、編纂した長編小説『西遊記』に登場する主人公の一人である。この明刊本『西遊記』によれば、彼は東勝神州にある傲来国ごうらいこくの、海中に聳える花果山の頂上にある仙石がある日、裂けて石の卵を生み、ついでその石卵が風を受けて誕生した石猴（石ザル）である。この石猴はサルたちの王になり、水簾洞すいれんどうと呼ばれる宮殿で、気ままに暮らしていたが、ある時命のはかなさを感じて、不老長生の術を求め旅に出る。やがて彼は須菩提じゆぼだい祖師という神仙に弟子入りし、修練を積んで、変身・変化の術や雲に乗り十万八千里を一挙に飛び越える筋斗雲きんとうんの術

などを会得した。この段階で、彼の名前は美猴王から孫悟空に変わり、更に花果山の水簾洞に戻ってからは東海の龍王・敖広ごうこうから如意金箍棒にょいこんこぼう、南海龍王・敖欽ごうしん、北海龍王・敖順ごうじゆん、西海龍王・敖閏ごうじゆんからも宝物の冠、履物、鎧を強奪するなどして自ら齊天大聖せいてんたいせいと名乗った。その後、彼は天界に招かれて蟠桃園ばんとうえんの番人になったが、不老長生を得られる西王母の桃を食べつくすなどの悪さばかりをし、あげくに太上老君の仙薬を盗み出して下界に戻った。激怒した玉帝が討伐しようとするが、孫悟空は仙薬の力で不死になっていて打つ手が無い。そこで玉帝に相談された釈迦如来が孫悟空に、「私の手のひらから出ることでできたなら、玉帝にたのんで天界を譲り渡してやるう。だができなかつた時には、下界にくんだり、もとの化け物に戻って修行を積まねばならない」という賭けを持ちか

ける。孫悟空は請け合い、勦斗雲に乗って天の果てまで行ったつもりになるが、それは釈迦如来の手のひらのうちであったので、取り押さえられ、五行山に封印された。五百年経ち、取経者探しの旅の途上にあった観音菩薩に助けられた孫悟空は、ついで三蔵法師の弟子となり、西天、すなわち天竺(インド)への旅に同行することになった。道中、猪八戒や沙悟浄を仲間に加えた一行は次々に襲い掛かる妖魔・妖怪と戦い、様々な困難を乗り越え……十四年の旅の後、天竺にたどり着く。その地で釈迦如来から五千四十八巻の經典を授けられた彼らは、帰路は金剛の雲に乗り、たちまち中国の首都長安に戻り、待ちわびていた唐の太宗から盛大な歓迎を受けた。やがて經典を納めた三蔵法師、孫悟空は仏になり、他の仲間たちもそれぞれの功績によつて使者や羅漢、天龍となり昇天した¹⁾。

おおよそ以上のような筋書きの明刊本『西遊記』の構成は百回からなり、その第一〜七回では石猴・孫悟空の誕生と彼が天界に引き起こした騒動(大鬧天宮)、第八回では釈迦如来の命令による観音菩薩の取経者探しの旅、第九〜十二回では太宗の地獄めぐりと三蔵法師の登場、

第十三回〜百回では西天への取経の旅とその成就が語られているが、全回を通じて八面六臂の活躍を繰り広げ、この痛快な物語の主人公を演じているのは紛れもなく石から生まれた孫悟空である。実際、彼は物語の最重要テーマである後半の旅においても、本来その主人公であるべき三蔵法師以上に重要な役割を果たして、後者は「まことに影がうすく……リーダーとしては、ほとんど失格者だといってよいだろう²⁾」。従つて、本稿においては、史実である三蔵法師の西天取経の旅に紛れ込み³⁾、その主役の座を篡奪した孫悟空がどのようにして創造されたか、言い換えれば彼の原型を探索することを試みる予定であるが、この虚構の創作物の誕生に関しては、これまで次のような諸説があげられてきた。

① 南方熊楠や胡適らはインドの英雄叙事詩『ラーマヤナ』に登場するハヌマーンが孫悟空の誕生への刺激になったとする。実際、この風の神ヴァーユと猿族の女性(アプサラスのアンジャンナー)との間に生まれたサル将軍は超能力の持ち主で、変幻自在の体を持ち、風のように空を飛び、山を持ち上げる怪力の持ち主である。彼は仕えていたサル王スグリーヴァがラーマに助けられた恩返しに、その妻シー

タターの探索隊に加わり、ランカー島に渡って魔王ラーヴァナを相手に獅子奮迅の戦いを繰り広げ、彼女を奪還するなど、叙事詩の後半では主人公であるラーマ以上に重要な役割を果たしている。⁽⁴⁾

② 唐代の李肇の『唐国史補』巻上に記されている「古い鉄の鎖に縛られ、淮河に閉じ込められていた青獼猴（黒い大ザル）」は『山海経』（但し、現行本には見えない）に「水獣でよく悪さをするので、禹が軍山の下に縛り付けた」とある無支祁（奇）であり、魯迅はこの「悪さをしたあげく絶対者によって岩に閉じ込められるサル」無支祁こそが孫悟空の直接の先祖であろうと推定する。⁽⁵⁾

③ 『漢武故事』（魯迅が編纂した『古小説鈎沈』所収）に漢の武帝の寵臣として登場する東方朔が「かつて西王母が三千年に一度だけ実をつける桃を植えたところ、三度も盗んだので彼女に懲らしめられた」という古い伝承が残されていて、このトリック・スターとして名高い東方朔も「桃を盗み、天界を騒がす」いたずら者としての孫悟空の原型の一人であったに違いない。⁽⁶⁾

④ 『西遊記』に登場する龍王たちは、様々な動物の部

品を合成し、理論上は最強の動物であるにもかかわらずあきれるほど弱く、それぞれが持っていた宝物を孫悟空に巻き上げられている。恐らく、孫悟空は中国古代において神聖視された龍の、その超能力・神通力の全てを譲り受けた存在であり、それ故機能の面において、彼は明らかに「龍からの変身者」であった。⁽⁷⁾

⑤ 『西遊記』とほぼ同時代の小説『封神演義』に登場する哪吒太子は、將軍李靖の第三子として三年六ヶ月母の胎内に留まった後生まれたが、醜い肉の塊であった。父親がその肉塊を剣で切り裂くと、男の子が飛び出してきたが、この子はいたずら好きで龍王の一族と絶えず騒動を起こした。しかし一度死んだ彼は蓮の花から再生し、その後は父ともども殷の紂王が率いる妖怪群と戦い、みごと周王朝の建国に貢献する等、その様々なモチーフ、とりわけ龍いじめの場面や機能・属性が孫悟空に驚くほどによく似ていて、「孫悟空の分身」であったと断定することが可能である。⁽⁸⁾

⑥ 晋代の干宝の『搜神記』や張華の『博物志』をはじめ、唐代の『補江総白猿伝』にサルが美女をさら

妻にして子供をませた異類婚姻譚が記録されているが、これら「好色なサル」の類話もまた戯曲『西遊記』の中で孫悟空が金鼎国の王女をさらい、妻にしたストーリーに影響を与えたものと考えられる。

⑦ 仏典・仏教説話には、上述した「好色なサル」とは対照的に、まじめな「求法のサル」が登場し、鉄丸を食らい銅汁を飲んで苦行したり、袈裟を着て修行したこと等々が物語られている。彼らもまた三蔵法師の弟子となり西天取經の旅に出る孫悟空の形成に何らかの役割を果たしたであろう。

⑧ 「金と火の性質を潜在的に持つている孫悟空が、風を受けて石卵から生まれるというイメージは、明らかに冶金術の最も初歩的な過程(すなわち、冶金のための石炉に火がおこされ、鞴ふいごの風が吹き付けられ、金属が誕生する)を示している」ので、孫悟空は金属の鍛錬、つまり錬金術師や鍛冶師の仕事と関係があり、奥野信太郎は「現行の西遊記の原型は、鍛冶職ギルドの伝承と根本的に深い関係を持ったものであろう」と指摘する。

⑨ 漢代の『淮南子』脩務訓には、夏王朝の始祖とされる禹は石から生まれたとあり、戦国時代の『随巢

子』(『釋史』卷一二所引)には、その子の啓もまた石に化した母(啓母石)から生まれたとあり、彼らも石から生まれた孫悟空の原型の一つにあげられよう。

⑩ また、入谷仙介はジョルジュ・デュメジルが提唱し、大林太良・吉田敦彦が日本神話の研究において大きな成果をあげた比較神話学の学説(三機能説)に依拠して、孫悟空の原型を次のようなインド・ヨーロッパ語族の神話例に認めるといふ新しい視座を取り入れている。

a. ギリシア神話の巨神テュポエウス(ガイアの末子)がゼウスに挑戦して激戦となったが、ほぼ勝利をおさめながら最終的に敗れてタルタロスに投げ込まれたストーリーは、天界を騒がした孫悟空が釈迦如来に敗れて五行山に幽閉されたそれとの類似が顕著であり、両者は「天界の篡奪者」であり、また失敗者であるという共通項を持つ。(62〜64頁)。

b. インド神話ではブラフマンとヴィシヌの二神が最高神の地位をめぐって争い、前者は白鳥に化して上昇し、後者は猪となって下降したが、いずれも原初の海に聳える巨大な柱(男根)の果てを極めること

に失敗した。するとシヴァア神が男根から姿を現し、二神に理を論したと語られ、『西遊記』の中では釈迦如来がシヴァア神の、孫悟空が失敗した二神の役割を演じている。(64～65頁)。

c. 『ラーマヤナ』と同様に、インドの英雄叙事詩である『マハーバータ』の主要人物である五王子のうち、アルジュナを除く四人の兄弟は『西遊記』に対応する人物が見出される。とりわけ第二王子のビーマは「父の風神から遺伝した疾風のごとき走力と、絶倫の怪力の持ち主で、敵を倒すために素手、あるいは棍棒を用いる。性格も善良ではあるが、粗暴で激情的であつて、しばしば怒りに任せて、無茶苦茶に乱暴を働き、敬愛する兄ユデイシユテイラに對してすら、時に反抗する」など、孫悟空と性格が極めてよく似ている。(67～82頁)。

d. ギリシア神話の神ヘルメスは泥棒の名人であり、翼のあるサンダルを履いて、高速で天空を駆け巡り、死者をあの世から呼び戻す力や自在に人を眠らせる力があり、家畜の守り神であり、百眼の怪物アルゴスを退治しているが、これらは全て孫悟空にも見出される機能・属性であり、エピソードである。(90

～95頁)。

e. 同じくギリシア神話の神プロメテウスは天界の火を盗み、そのためコーカサス山に鉄鎖で縛り付けられ、大鷲に毎日肝臓を食われるという責め苦を受け続けるが、不死であるためにその苦難は止む時がない。しかも彼は鉄鎖の代わりに、鋼鉄と岩石で作った指輪をその身につけることを命じられて解放されるが、孫悟空もまた西王母の桃を盗み天界を荒らした罪に服して、長い年月閉じ込められ、三蔵法師に解放されても「彼の命令に背かないために、頭に緊箍児きんこじという金輪をはめられていた」と語られ、両者の物語のある部分は完全に吻合している。(95～99頁)。

f. 同じくギリシア神話の英雄ヘラクレスも「取るに足らぬ凡人であるエウリュステウスの命じるままに……数多くの冒険に追いやられる」運命にあり、しかもその冒険では棍棒を武器とし、二度にわたつてライオンを退治し、ヘスペリスの黄金の林檎を盗み、また極めてたくましい豪傑であるのに女装するなど、「凡人である三蔵法師の命じるままに、数々の冒険を重ねる」孫悟空と酷似するエピソードの持ち主である。(99～106頁)。

g. この他、コーカサスのオセツト族に伝わるナルト叙事詩の勇士バトラズとソスラン、インドの戦士神イन्द्रラ、北欧神話の戦士神トールなどにも、孫悟空に共通する第二機能の神や英雄に見出される機能・属性、エピソードが見出される。(122~129頁)。

以上の如く『西遊記』は様々な地域の、主としてユーラシア大陸に広く分布していた神話や伝説、叙事詩、民間伝承を吸収し、更に金・元代の妖怪仮面劇のような演劇からも大きな影響を受けて成立した「一大神話的ドラマ」であり、その主人公の一人である孫悟空の原型としては複数の、しかもハヌマーンのように決定的な影響を与えたと推定される存在が認められることは見てきたとおりである。但し、私見によればこれら諸説の他に、孫悟空の原型の一つとしてヒッタイトのクマルビ神話に登場するウルリクムミを取りあげ、あるいはその神話もまた孫悟空の誕生に刺激を与えたのではないかという可能性について考察する必要がある、本稿においては「石から生まれたもの」という共通項を持つこの二つの神話を比較・論究したいと考えている。

二 クマルビ神話と鯨・禹・啓の神話

クマルビ神話はシリアからイラク北部を中心とする地域に居住していたフリ系の人々が語っていたものを、ヒッタイト王国の人々が自国語に訳したもので、その上巻「クマルビの歌」では三代にわたる天上の王権をめぐる戦いが、下巻「ウルリクムミの歌」ではクマルビの息子が天界の神々に挑戦するさまが描かれている。そのあら筋はおおよそ次のようなものである。¹⁴⁾

① 原初の、年老いた神々への呼びかけで物語は始まる。すなわち、この段階でクマルビ神話は始原の時を語る天地や宇宙の創造神話ではないことが明示されている。

② 遠い昔、アラルが天上における王として君臨し、神々の中でも第一人者である「力強き」アヌが彼に恭しく仕えていた。

③ 九年後、アヌがアラルに戦いを仕掛けて打ち倒し、アラルは暗黒の大地に姿を消した。アヌが彼に代わって玉座に坐り、天上における王として君臨し、「力強き」クマルビが彼に恭しく仕えるようになった。

④ 更に九年後、クマルビがアヌに戦いを仕掛けて打ち倒し、アヌはクマルビの手をかくぐって逃げ出した。そこでクマルビはアヌに追いつき、その腰部に噛み付いたので、後者の精液（もしくは男性性器）がクマルビの胎内に流れ込み、そこにとどまった。

⑤ 天上における王となり、勝利に酔いしれるクマルビに対して、敗北者のアヌが「お前の胎内には私の三人の子供たち（高貴なる天候神テシュブ、テイグリス河の別名であるアランザヒ河、高貴なるタシユミシュ神）が宿り、やがて生まれてきた彼らによってお前は破滅するであろう」と予言する。

⑥ この後、アヌは天空に姿を消す。彼に代わって玉座に坐ったクマルビは必死になってアヌの精液を吐き出そうとするが、完全に吐き出すことが出来ず、天候神だけはその胎内にとどまり、成長し続けた。

⑦ やがて月満ちて、クマルビの体から天候神が生まれてくるが、それは当然のことながら難産であり、帝王切開もしくは著しく男性であるクマルビの体を損傷するものであったと推定される。従って、この段階で王権は身体障害者となったクマルビから天候神

に移り、前者は敗北者・落伍者という烙印を押される。

⑧ クマルビは実質的にはアヌの息子である天候神に奪われた天上の王権を奪い返すために、冷たい水の湧き出している「泉」の辺にある大きな「岩」と幾度も交わり、ウルリクムミという息子を生む。その名前は天候神の聖なる都市クムミヤを破壊するものを意味し、息子が成長してテシュブを打ち倒し、天上の王権を取り戻して欲しいというクマルビの願望がこめられている。

⑨ ウルリクムミは母と同様に全身が「岩」もしくはクンクヌツジと呼ばれる「石」でできていたが、クマルビはこの生まれたばかりの息子を天界の神々が傷つけたり、殺したりしないように「暗黒の大地」に委ねた。そこにはウペルリというギリシア神話のアトラスに似た巨人がいて、ウルリクムミはその右肩に刃物のように突き立てられ、「大いなる海」が彼を覆い隠した。

⑩ やがてウルリクムミは異常な速さで成長し、彼を隠していた海からその姿を現し、まもなく彼の頭部は天界に達するまでになった。

- ① 太陽神がこの海中から立ち上がり、急激に成長するウルリクムミを見て、天界に赴き天候神に報告した。しかし天候神はこの石の怪物と戦う勇気が無く、彼の兄弟タシュミシユと嘆き、途方にくれるばかりであった。また、彼の姉妹のシャウシユカ(メソポタミアの愛と戦いの女神イシュタルのフリ名)がウルリクムミを誘惑するが、彼女の魅力もこの「耳が聞こえず、口も利けず、眼も見えない」怪物には無力であった。
- ② 気を取り直した天候神は軍神アシユタビや七十人の神々とウルリクムミに戦いを挑むが、まるで歯が立たず、後者は依然として成長し続け、ついに天候神の妻ヘパトの神殿にまで侵入した。
- ③ 絶体絶命の窮地に追い込まれた天候神はエア、エンリルといったメソポタミアの神々に助けを求め、ウルリクムミの唯一の弱点がウベルリの右肩に突き立てられたその足にあることを知る。
- ④ そこで天候神はかつて原初の、年老いた神々が「天と地を切り離した刃物」を手に入れ、ウルリクムミの両足を切断したので、後者は神通力を失い、大地に倒れてしまう。
- ⑤ 現在残っているテキストは、ウルリクムミがおおしい敵意に満ちた言葉を吐いている箇所では破損している。従って、戦いの決着がどのように終わったのかということは不明であるが、恐らくウルリクムミは敗北し、天候神の天上における王権は不動のものとなったと推定されている。
- このように語られ、記録されたクマルビ神話がメソポタミア(シュメール・バビロニア)の神話、とりわけ「エヌマ・エリシュ」と名づけられた天地創造神話の影響を受けつつ成立し、ついでギリシアに伝わりヘシオドスの『神統記』になったことは夙に先学によって論証されているが、¹⁵ 私自身はかつて「中国古代の神統記」という論文の中でその神話が中国にも伝えられ、夏王朝の三代の支配者たち―鯀・禹・啓の神話として再生し、記録された可能性を立証したことがある。¹⁶ しかもクマルビ神話は、そのオリジナル版である「エヌマ・エリシュ」よりも、そのレプリカとも言いうる『神統記』よりも、この中国の神話に顕著な類似の痕跡を残していて、両者の対応は到底偶然の産物とはなし難いのである。以下に、そのクマルビ神話と鯀・禹・啓の神話とに見出される類

似点を時間軸に沿って略述する。

a. クマルビ神話においては、天地創造神話としての要素が希薄であり、すでに天と地は原初の、年老いた神々によって創造され、更に彼らによって切り離されていたことが明記されている。一方、鯀・禹・啓の神話においても天地創造神話の要素は表面的には完全に欠落し、天と地の分離も彼らに先行する帝顓頊せんくの時代にすでに完了している⁽¹⁷⁾。

b. クマルビ神話では天上の王権、すなわち王位の世代交代がアラル、アヌ、クマルビという三代の主従間で繰り返されているが、同じく鯀・禹・啓の神話の場合にも、彼らに先行する聖天子堯・舜から禹に至る王権の移譲が主従間で、血縁・血統とは無関係に行われている⁽¹⁸⁾。

c. クマルビはアヌの精液（もしくは男性性器）を飲み込むことによって妊娠し、男性でありながら出産するという両性具有者であるが、『山海経』海内経に「帝は祝融に命じて鯀を羽郊で殺させた。すると鯀は禹を生んだ」〔原文：帝令祝融殺鯀于羽郊。鯀復生禹〕とあり、『楚辞』天問にも「伯禹は鯀の腹の中にいたが、一体彼はどのようにして態を変えて誕

生したのであろうか」〔原文：伯禹腹鯀、夫何以變化〕と謡われる等、複数の文献に鯀がその腹の中に禹を身ごもり、出産したことを窺がわせる記述が見出だされ、彼もまた両性具有というモチーフの持ち主である⁽¹⁹⁾。

d. しかもクマルビが天候神を生むのには大変な苦痛を伴い、天候神も腹の中からその実質的な父であるアヌに話しかけ、クマルビのどの部分から誕生すべきかを延々と論じているので、その背景に英雄伝説に特有の難産もしくは帝王切開というモチーフが語られていたと推定される。一方、鯀と禹の場合にも『楚辞』天問に「鯀の死体は永く羽山に放置されていたが、三年腐らなかつたその腹の中に禹がいた」〔原文：永遏在羽山、夫何三年不施、伯禹腹鯀〕とあり、『初学記』22、『路史後紀』注12に引く『帰藏』啓筮にも「鯀は死んでから三年経つても腐らなかつた。その死体を呉刀という名刀で割いたところ禹が出てきた」とあり、同じく難産もしくは帝王切開のモチーフが見出される⁽²⁰⁾。

e. クマルビは「泉」のほとりにある「岩」と交わり、生まれたばかりのウルリクムミを「暗黒の大地」を

覆う「大いなる海」に隠してもらう等、水界と深く結合しているが、鯀もその名前が示すように「本態は魚」であり、死後に黄龍(『山海経』海内経の郭璞注)や黄能(『国語』晋語八)、玄魚(『拾遺記』卷八)に変身したという記述も、彼が水界に所属する存在であったことの一表現であつたらう。²¹⁾

f. ウルリクムミは母なる「岩」から生まれたことが明記されているが、鯀・禹・啓の神話ではこのモティーフは禹と啓の二代にわたって繰り返されている。実際、禹は上述した父である鯀からの誕生の他に、『淮南子』脩務訓に「禹は石から生まれた」「原文…禹生於石」とあり、また石坳、石紐という地で生まれたとする文献が複数残されている。一方、啓は『淮南子』(『楚辞』天問の洪興祖補注、および『漢書』武帝紀の顔師古注引)に「禹は洪水を治めるために熊になって仕事をしていたが、ある時妻の塗山氏が食事を届けに行つてその姿を見てしまった。彼女は恥じて走り去り、崇高山の下で石に化したがかぶと、石の北方が破れて啓が生まれた」とあり、

……禹が妊娠していた彼女を追い、わが子を返せと叫ぶと、石の北方が破れて啓が生まれた」とあり、『楚辞』天問にも「どうして勤勉な息子である啓は

母を屠つて生まれ、その母の死体は裂けてこの世を終えたのであろうか」「原文…何勤子屠母、而死分竟地」と謡われているので、禹と啓は「石」から生まれ、しかもその母の体を分断したというモティーフを共有していたということが可能である。²²⁾

g. ウルリクムミは異常な速さで成長し、彼を覆い隠していた「大いなる海」からその姿を現している。一方、『史記』夏本紀には「禹は辛壬の日に塗山氏を娶り、癸甲の日に啓が生まれた」「原文…禹曰予辛壬娶塗山、癸甲生啓」とあり、洪水の大事業に従事していた禹は、辛壬から癸甲に至る僅か四日間で妻を娶り、しかも(妻となった塗山氏が)啓を生んだことが明記されている。この「わずかに二日間で妻を娶り、娶つてから二日で子供が生まれるという非現実的な叙述」は従来様々な解釈がなされてきたが、あるいはその背景には帝王説話に類例の多い急速な成長というモティーフがあり、啓もまたそのような帝王の一人であつたという中国的表現であつたとも考えられよう。²³⁾

h. やがてウルリクムミは天界に侵入し、天候神をはじめとする神々を恐怖に陥れるが、啓にも天界を訪問

したという記録が幾つか残されている。例えば、『山海経』大荒西経には「夏后開（啓）は三度賓客として天界を訪れ、九辯・九歌という天帝の楽曲を導入し、地上にもどった」「原文…夏后開上三嬪于天、得九辯與九歌以下」とあり、『楚辭』天問にも「啓はしばしば帝の賓客となり、九辯・九歌を入手した」「原文…啓棘賓商（天、もしくは帝）、九辯九歌」とある等、啓自らが天界を訪問したことは疑う余地が無い。しかも彼の訪問は、「嬪」もしくは「賓」という文字からも正装を整え、礼儀を弁えたものようであるが、郭璞はこの『山海経』の記述に「啓は天に上って天帝の九辯・九歌を盗んだ」と注解を加えているので、それはウルリクムミと同様に侵入、もしくは侵略に他ならなかった可能性が大である。²⁴⁾

以上、クマルビ神話と鯀・禹・啓の神話には、八項目もの類似もしくは対応するモチーフが認められることを見てきたが、上述したようにそれらは偶然の所産とは考えられないほどに細部にわたり、しかもその特異さという点でも決定的である。例えば、クマルビ神話におい

て最も特異な点は両性具有というモチーフにあり、クマルビは男性でありながら妊娠し、天候神を生んでいるが、鯀もまたその腹に禹を身ごもり、三年の歳月の後に出産している。しかもこの段階でクマルビは天候神に王権を奪われ、敗北者となっているように、鯀もまた帝堯に洪水を治めるように命じられたが、その大事業を完成することが出来なかった失敗者・落伍者である。²⁵⁾一方、クマルビが最初に生んだ天候神は、アラル、アヌ、クマルビに次いで天上の王権を掌握し、後にその地位を不動のものとしたことが推定されているが、鯀から生まれた禹も父に代わって洪水を治めるという大事業に取り組み、彼に先行する聖天子たちが繰り返した「禪讓」に終止符を打ち、世襲の夏王朝の始祖となっている。また、クマルビが「岩」と交わり、二番目に生んだウルリクムミは、異常な速さで成長し、天界に侵入している点において、禹の息子の啓に対応し、彼もまた「石」となった塗山氏から生まれ、急速に成長し、天界を訪問している²⁶⁾ので、両者の類似は決定的である。

三 鯀・禹・啓の神話と『西遊記』

前節においては、中国の歴史の、その最初の世襲王朝

である夏を建国した禹と、彼の父親である鯀、そして息子の啓に関する三代の神話には、クマルビ神話との顕著な類似が認められることを見てきた。本節においてはその神話が長い歳月を経て明代の呉承恩が纏めた(とされる)長編小説『西遊記』の中に取り込まれ、その主人公である孫悟空にはウルリクムミと啓に酷似するモティーフや属性・機能が付け加えられ、語られるようになった可能性について論究したい。以下に、鯀・禹・啓の神話と『西遊記』に認められる対応・類似点を取りあげ、とりわけウルリクムミと啓(時に禹)、そして孫悟空との間にはオリジナルとレプリカの關係が認められること、言い換えれば孫悟空の原型の一つにウルリクムミや啓もまた加えられるべきなのではないかということを立証する。

a. 彼らはいずれも「岩」もしくは「石」から生まれてゐる。ウルリクムミは「岩」から、啓は塗山氏が化した「石」(啓母石)から、そして孫悟空は「花果山の頂上の石」、もしくはその「石」が裂けて生まれた「石卵」から誕生している。しかも上述したように、鯀・禹・啓の神話においては、啓ばかりではなく禹にもこの「石」からの誕生を推定される文献

が残されていて、その結果『楚辭』天間に謡われている「勤子」が禹のことであるか、啓のことであるかが判然としないことは注(22)で論究した通りである。あるいはクマルビ神話の中でウルリクムミがクマルビの息子として「岩」から生まれたというモティーフが、クマルビと同定される鯀の息子である禹に誤って受け継がれ、ついでウルリクムミと同定される啓にも受け継がれた結果、禹と啓がともに「石」から生まれたという記述が重複したのかもしれない。そしてこの重複は『西遊記』では初めに「花果山の石」が裂けて「石卵」が生まれ、ついでその「石卵」が化して石サルが誕生したと二度にわたる「石」からの誕生が語られることによつて、(重複を)解決・解消したとも考えられよう。

b. しかも彼らはいずれもその母であるものの肉体を裂いて、もしくは分断して誕生したことが特筆されてゐる。但し、ウルリクムミの場合には、彼の誕生にともない母なる「岩」が分断されたという記述は見出されないが、クマルビが生まれた息子を「暗黒の大地」へと、そして「大いなる海」に委ねているのを見ると、母なる「岩」は既にその役割を終え、死

んでいたことが推定されよう。一方、禹と啓には母なる「石」を裂いて生まれたことを繰り返し強調する文献が残され、孫悟空の場合にも花果山の頂上の「石」は裂けて「石卵」が生まれ、その「石卵」が風を受けて石サルが生まれたと記録され、ウルリクムミや禹・啓と同様に母なる「石」は分断されていたことは明らかである。²⁷⁾

c. 彼らはいずれも海、もしくは水界と関与している。ウルリクムミが生まれた「岩」は冷たい水の湧き出る「泉」の傍らにあり、更に「大いなる海」に庇護されて成長している。一方、啓の場合にはそれは彼が生まれた時に父である禹が治水に当たっていた大地を覆う「洪水」として表現され、彼自身もまた『山海経』大荒西経では「西南海の外、赤水の南」に居住している。また、孫悟空は「海」のかたなにある傲来国の、海中に聳える花果山の頂上で生まれ、しかも美猴王と名乗っていた彼の住居は「滝」の奥に開けた水簾洞であったとも語られている。彼らの父もしくは祖父は敗北者・失敗者であり、彼ら自身もまた天界の神々に対する反逆者である。ウルリクムミの父クマルビは天上の王権をめぐって天

候神に敗れ、禹の父であり、啓の祖父でもある鯀は天帝の息壤きじょうという土を盗んで誅殺され、孫悟空自身も「大鬧天宮」故事では天界の神々に挑戦し、敗れて五行山に幽閉されている。²⁸⁾

e. 彼らはいずれも天界に侵入・侵略し、もしくは訪問している。ウルリクムミは急速に成長して天界に到達し、その神殿に迫って天候神の妻ヘバトを脅かさせ、啓もまた二匹の龍に乗って天帝のもとを訪問し、九辯・九歌という天界の音楽を入手もしくは盗み、孫悟空も招待された天界で暴れ周り、西王母の桃をあらかた食べてしまったことや美酒・珍珠・不老不死の薬を盗みだしたことで名高く、天界の神々はこの侵略者・侵入者たちに手を焼いたことは明らかである。²⁹⁾

f. その結果、彼らは天界の神々と戦い、緒戦では勝利を獲得するが、最終的に外来の神に敗れている。ウルリクムミは天候神テシユブ、その兄弟タシユミシユ、姉妹シャウシユカ、その他の神々と戦い、勝利をおさめるが、最後には外来の神であるエア、エンリルといったメソポタミアの神々の助力・助言を受けた天候神に敗れ、大地に倒れている。但し、こ

のモチーフは啓には顕著な形で見出すことが出来ず、むしろ孫悟空に直接に受け継がれたようである。

g. 孫悟空は玉帝が遣わした李靖、李靖の第三子哪吒太子等との緒戦には勝利するが、ついで顕聖二郎真君等との戦いには敗れ、更に外来の神である釈迦如来との賭けにも負けて、最終的に敗北者となっている。彼らはいずれも幽閉・拘禁されている。上述したように、ウルリクムミの最後に関しては粘土板の資料の破損が甚だしく不明であるが、彼のレプリカといわれるギリシア神話のテュポエウスはゼウスの雷に打たれ、エトナ山の塊で押しつぶされ、その下に幽閉されたと語られている。⁽³⁰⁾ 一方、啓には『楚辞』天

問に「啓が益に代わって天子の位についた時、にわかには禍難に遭遇したが、どうして災難にあつて拘禁されながら、後に自由になることが出来たのであるうか」「原文・啓代益作后、卒然離孽、何啓惟憂、而能拘是達」いう詩句があり、事情は不明ながら拘禁されたことが記録されている。⁽³¹⁾ また、孫悟空の場合は釈迦如来との賭けに負け、その結果後者の五本の指から作られた五行山の下に封印されたことが明記され、エトナ山に押しつぶされ、幽閉されたテュ

ポエウスとの類似がより顕著である。

h. この他、ウルリクムミはクマルビ神話全篇を通して石の怪物であり、耳が聞こえず、口がきけず、目も見えない「暗愚」な存在であり続けるが、啓の場合には天界の音楽である九辯・九歌を入手もしくは盗んで下界にもどった後、遊びほうけ、狩場での飲食に酔いしれた「暗君」とする文献(『墨子』非樂上、『楚辞』離騷等)と、対照的に賢く、よく慎んで禹の道を受け継いだ「名君」とする文献(『孟子』万章、『史記』夏本紀等)とが並存したことに注目したい。このように啓がマイナス評価されると同時に、プラス評価が付加され、^{アンビバレント}両面的な存在であったとする説が何に由来するのかわかり不明であるが、彼の子孫もしくは後継者としての一面を持つ孫悟空の場合には、それは「天界に侵入し、混乱に陥れた」暴れん坊としてのマイナスの一面と、長い幽閉生活の後「三蔵法師に救出されて、天竺に経典を求めて旅立ち、その困難な旅にあつて常に三蔵法師を助け、目的を達成する」英雄としてのプラスの一面として物語られている。⁽³²⁾

クマルビ神話と鯨・禹・啓の神話に八項目の対応・類似点が認められた様に、この二つの神話と『西遊記』、もしくはそれぞれの主人公であるウルリクムミと啓（時に禹）、そして孫悟空との間にも八項目の対応・類似点が見出されることをみてきたが、それらのうち⑥にあげた「天界の神々との戦い」というモティーフは啓には欠落し、また⑧にあげた「マイナス評価とプラス評価を同時に付加され、両価的な存在」であるという属性は、ウルリクムミには全く見出されないという相違点があるともまた事実である。但し、それらは伝播・影響の過程に存在した長大な距離と時間の経過の結果として、また孫悟空の場合はその原型が複数・多岐にわたることに由来すると解釈することが出来る。

四 結論

このように見えてくると、ヒッタイト王国がアナトリアに栄えていた時代（前一三八〇〜前一二〇〇年頃の帝国時代）、その周辺部に居住していたフリ人の文化や思想、宗教から著しい影響を受けて記録されたクマルビ神話が、ついで西方のギリシアに伝えられてヘシオドスの『神統記』に受け入れられ、一方では東方の中国にもたらされ

て鯨・禹・啓の三代の神話となり、更に時代を経て『西遊記』の孫悟空にその影響を与えたと推定することが可能である。上述したように、孫悟空の原型はこのクマルビ神話のウルリクムミや啓ばかりではなく、インドのハヌマンやその他中国古来の龍や怪物等の神通力や冒險譚を受け入れたものであることはいうまでも無いが、ヒッタイトのクマルビ神話は、先ず夏王朝の鯨・禹・啓の神話に影響を与え、ついでその特異なエピソード（「石」からの誕生やその母なる肉体の分断等）を『西遊記』の主人公に引き継がれたことは疑う余地がないであろう。実際、注（13）で取りあげた入谷仙介氏はこの「古代のオリエン트에存在した」ウルリクムミの神話は、ギリシア神話のテュポエウスのそれと同様に孫悟空に影響を与えたことを指摘しているが、本稿においては彼の論考に欠けていた鯨・禹・啓の神話をその中間に加え、更にクマルビ神話の詳細な内容を比較材料として検討することによって誤解や誤読を解消し、孫悟空の誕生にはこのはるか遠いヒッタイトの国で語られていた神話が刺激を与え、その原型の一つとなったであろうことを提唱するものである。

註

- (1) 本稿においては、中野美代子訳『西遊記』(一) (十) 岩波書店、一九八六〜二〇〇五年の他、君島久子訳『西遊記』ポプラ社、一九六九年、中野美代子 a 『孫悟空の誕生』玉川大学出版部、一九八〇年、b 『西遊記の秘密』福武書店、一九八四年、c 『孫悟空はサルかな?』日本文芸社、一九九二年、d 『孫悟空との対話』日本放送出版協会、一九九三年、e 『西遊記』トリック・ワールド探訪』岩波書店、二〇〇〇年、f 『なぜ孫悟空のあたまには輪っかがあるのか?』岩波書店、二〇一三年等を参照した。
- (2) 中野 e、二一〜二三頁参照。氏によれば、「小説の中の三蔵法師は、孫悟空や猪八戒に較べると、まことに影がうすい。のみならず、臆病でわからずやで、えこひいきが甚だしく、あらゆる危機に対しての「学習」能力が乏しく、ために悟空を困らせること毎度おなじみである」とされ、その背景には三蔵法師の入寂の後に始まった彼のイメージの神秘化や伝説化が、年月を経て「動物の従者を伴って取経の旅に出たという虚構」を生み出し、ついでの破天荒な発想の面白さの故に、主人公の地位の逆転現象がおこったことを指摘する。
- (3) 前嶋信次『玄奘三蔵―史実西遊記』岩波書店、一九五二年、前田耕作『玄奘三蔵、シルクロードを行く』岩波書店、二〇一〇年。
- (4) 中野 a、一九四頁以下、同じく b、一二頁ではハヌマーンこそが孫悟空の先祖であるという説を紹介し、「インドから南海をめぐって福建に渡ってきたハヌマーンが、中国固有の民話の中のサルたちを刺激し、ここに全く新しいサルが誕生した」と述べている。
- (5) 中野 a、五三〜五六頁、一九〇頁、e、二二〇頁等参照。なお、伊藤清司『中国の神話・伝説』東方書店、一九九六年、一〇二〜一〇六頁には、水怪・無支祁は「形がサルに似ており――頭は自由に伸び縮みし、九頭の象を動かすほどの怪力の持ち主である。跳びはね、駆け巡り、あちこち暴れまわる。その身軽なこと、眼にもとまらぬ速さである」が、禹が家来の庚辰に命じて「その頭に大きな鎖を繋ぎ、鼻に穴を開けて黄金の鈴を吊るし、淮水の北にある亀山の麓に移し、治水の邪魔をしないようにした」と記し、無支祁が「暴れて鎖で岩に閉じ込められるサル」の一種であったことを指摘する。
- (6) 中野 a、六六〜六七、一三三〜一三三頁。
- (7) 中野 b、三三頁以下には「龍からの変身―孫悟空のもう一つの誕生」が論じられ、同じく e、一二〜一三頁では、「天空を飛翔する、水中を遊泳する、体自在に伸縮させたり変化させたりする龍の超能力」は、ことごとくサルの悟空に譲り渡された可能性が指摘されている。
- (8) 中野 b、二二四〜二二八頁、安能務訳『封神演義』上、講談社、一九八八年、一九七頁以下参照。
- (9) 中野 a、三七〜四三頁。
- (10) 同上、六九〜八九頁。なお、中野 b、二四〜二八頁では、孫悟空には暴れて岩に閉じ込められたり、美女をさらう「悪いサル」と、仏法を求めまじめな「良いサ

ル」という二つのイメージがあるが、あるいはこれは「水滸伝」に登場する百八人の好漢たちが「天の星が降生して魔王となり、恐らくは悪事を働いていたところを伏魔殿に閉じ込められることによって再生し、今度は正義の味方となって悪と戦うという構成」に対応するものであり、二つの小説の「構造上の類似」が指摘されている。

(11) 中野b、一九〇二頁。

(12) 同上、一五―一六頁では、「生殖の石」(ペトラ・ゲニトリクス)と呼ばれる神話的概念に注目し、「このような生殖の石は、もちろん中国にもあり——最も有名なのが夏王朝の始祖とされる禹とその子の啓についての伝説である」と述べ、後にc、八八頁においては「禹やその子の啓が石から生まれたことと、——その禹の大事業であった治水をめぐるいくつかの伝説も、はるかに下って孫悟空の形成にあずかっている」と断定している。

(13) 入谷仙介『西遊記の神話学』中央公論社、一九九八年参照。なお、本書の六三―六四頁では、インド・ヨーロッパ語族の神話以外にも、孫悟空の「大開天宮に酷似した神話が古代のオリエントに存在した。ヒッタイトのウルリクムミ神話がそれである」として、両者の類似を「つぎのように指摘する。「ウルリクムミと孫悟空とは、いずれも天ないし天神を父とし、岩を母として生まれ、現在の天の支配者を敵として、天に攻め込む。天の側は、はじめ美女、または地位を与えて丸め込もうとするが、通じない。そこで天の側の決定的な武器である雷で攻撃するが、これも失敗に終わる。ついに天神の力では解決

石から生まれたもの

できず、他処の神の救援を仰いで、ようやく平定する。なお、ウルリクムミの身体は海底から伸び上がって、無限に成長する石の巨大な棒としてイメージされているが、孫悟空の武器である如意棒もまた、海底の龍王の宝庫に収蔵されていた、無限の成長能力を持つ鉄棒であって、この面からも関連が感じられる。しかし入谷氏がこのように言及するウルリクムミの解釈には誤解が多々あり、一つはウルリクムミと孫悟空とは、いずれも天ないし天神を父として生まれたとするが、ウルリクムミの父であるクマルビは天ないしは天神ではなく、むしろ大地や水界と結合した神である。一方、孫悟空も須菩提祖師に「両親」がいないことを明言していて、彼を天ないし天神を父としていると定義することは不可能である。第二にウルリクムミは天界に攻め込むが、天の側ははじめに美女、ついで地位を与えて丸め込もうとしたとあるが、現存するウルリクムミのテキストには該当する記述がない。第三にウルリクムミの身体が無限に成長する石の巨大な棒としてイメージされているのは、孫悟空の武器である如意棒が無限に成長する鉄棒であることと関連すると説くが、如意棒は伸びたり縮んだりする能力があり、ウルリクムミの一方的に、無限に成長することと同定すべきではない。この他、氏は『古事記』に見えるオオクニヌシと孫悟空の比較を試みているが、両者の類似もまた余りに牽強附会に思われるので、本稿における孫悟空の原型としては割愛し、インド・ヨーロッパ語族の神話例だけをあげるにとどめた。従って、以下に試みる私自身の

九三 (九三)

ウルミクルミと孫悟空との比較は、氏の論考とは全く別個の資料、解釈に基づいている。

- (14) クマルビ神話に関しては、杉勇他訳『古代オリエント集』筑摩書房、一九七八年、三四九～三六六頁に収録されたもの他、A. Goetze, *Kingship in Heaven, and The Song of Ullikummi*, in J. B. Pritchard (ed.), *Ancient Near Eastern Texts relating to the Old Testament*, Princeton, 1950, pp. 120～125, Harry A. Hoffner, Jr., *Hittite Myths*, Atlanta, Georgia, 1998, pp. 40～80を参照した。
- (15) 吉田敦彦「ギリシアとオリエントの神統記神話」『ギリシア神話と日本神話』みず書房、一九七四年、九〇頁、西村賀子「古代ギリシアの創成神話」(月本昭男編『創成神話の研究』リトン、一九九六年、一六五頁)の他、C. Pengase, *Greek Myths and Mesopotamia: Parallels and Influence in the Homeric Hymns and Hesiod*, New York, 1994を参照。
- (16) 拙論、『西王母の原像』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年、二七五～二九七頁所収。
- (17) 拙論、二八三頁参照。伊藤清司、前掲書、一九九六年、二八頁では、『山海經』大荒西経に「顓頊が老童を生み、老童が重および黎を生んだ。帝は重に命じて上天に献じさせ、黎に命じて下地に叩させた」とあり、『国語』楚語にも類似の記述があるところから、天と地の分離は『史記』夏本紀によれば、鯀の父である) 帝顓頊の時代に重黎(一人説と二人説がある)によってすでに完了していたことを指摘する。
- (18) 拙論、二七九、および二八三頁参照。但し、クマルビ神話では主従間で繰り返されるこの王位の世代交代は、武力闘争を経ているのに対して、中国の場合には一禅譲じやうじやうと呼ばれ、聖天子が血縁関係ではなく、有徳な家臣に王権を委譲するといった形をとる。
- (19) 拙論、二八〇～二八一頁、および龔維英「鯀為女性説」『活頁文選叢刊』二二、一九七九年、一～五頁等参照。
- (20) 拙論、二八一頁、および岡田明子・小林登志子「古代メソポタミアの神々」集英社、二〇〇〇年、一六四頁参照。
- (21) 拙論、二八四頁、および白川静『中国の神話』中央公論社、一九七五年、六四頁参照。
- (22) 拙論、二八一～二八二、二八四～二八五、二九五頁、および工藤元男「禹の変容と五祀」(『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、一九九九年、二九五～二九八頁)参照。なお、禹には後に感生帝説の主人公として処女懐胎した脩己、女嬃、女志といった女性から生まれたとする伝承が付け加えられるが、その段階においても彼は母のわき腹もしくは胸を裂いて生まれたとされ、母の体を分断している。また、啓の名前は母の体を引き裂いて誕生したことに由来し、開とも表記されることから、『楚辞』天問の「何勤子屠母、而死分竟地」という詩句は、後漢の王逸は「勤勉な息子である禹が母の背を裂いて生まれ、その母は体を分断されて地上の生を終えた」と解釈するが、啓の説話と見るべきだとする説もあり、この「勤子」を禹のこととするか啓のこととするか

は決めがたい。

(23) 拙論「二八五〜二八六頁参照。なお『史記』のこの語句の解釈に諸説があることは、下見隆雄「列女伝の研究」東海大学出版会、一九八九年、一四〇〜一四八頁参照。

(24) 拙論、二八二、二八五頁、および前野直彬『山海経・列仙伝』集英社、一九七五年、五六八頁参照。

(25) 拙論、二八〇頁、および伊藤清司、前掲書、一五九、三二九頁参照。

(26) 従って、クマルビは鯨と、天候神は禹と、ウルリクムミは啓と対応するが、クマルビと鯨が敗北者・失敗者であること、天候神がシャウシユカや他の神々の援助を得てウルリクムミをようやく打ち倒しているように、禹もまた人面蛇身の神(伏羲)、西王母の娘(瑤姫と呼ばれる雲華夫人)、多くの聖獣(黄龍、玄亀、黒い大蛇)の助けを受けて治水という大事業を成し遂げていること等々も考え併せるならば、この二つの神話には十項目を越える類似が認められる。

(27) 実際、中野美代子『西遊記』(一)、二〇〇五年、五二頁では、須菩提祖師の質問に答えて、孫悟空が「わたしめに両親はございません」と答えている。

(28) 中野b、一三三頁では、『西遊記』巻七回までの、とりわけ「大鬧天宮」故事における孫悟空は、天界の神々を相手に大暴れする、いわば反体制的な英雄であるとする。

(29) なお、ウルリクムミが天界に侵入して脅かしたヒツタイトの女神へバトは、天候神の妻としてヤジリカヤの壁

石から生まれたもの

画にえがかれているが、王冠を被り、二頭の豹を従え、

山の上に立つその姿は、孫悟空が天界に招待された時にその桃を盗んだ西王母の、漢代以降の画像石・画像碑に描かれている姿を彷彿とさせる点も興味深い一致である。

クルート・ビッテル著、大村幸弘・吉田大輔訳「ヒツタイト王国の発見」山本書店、一九九一年、一三六〜一四〇頁、小南一郎「西王母と七夕伝承」平凡社、一九九一年、二四二頁以下の「絶対者としての西王母」参照。

(30) ルネ・マルタン監修、松村一男訳「ギリシア・ローマ神話文化事典」原書房、一九九七年、一四二〜一四三頁参照。

(31) 拙論、二九六頁参照。

(32) 例えば、それは注(10)で言及したように「美人をさらう好色なサル」と「まじめな求法のサル」が孫悟空の原型にあげられていることによっても認められる属性である。